



隠れた出血傾向について

臨床検査医学科 田中 朝志

人間には進化の過程を通して巧妙な止血機能が備わってきました。そのため軽い出血傾向があっても軽い怪我ですぐに止血し、日常生活で出血が問題になることはあまりありません。しかし、病院で観血的な処置や手術を受ける際には出血への対応が必要な場合があり、今回は「隠れた出血傾向」について解説します。

・出血傾向を疑う状態

外傷(強い打撲や深い切り傷等)や抜歯の後に出血が続いたり傷の治りが悪かったりというのがヒントになります。女性では月経過多も重要な所見です。量が多い時期でも「2 時間おきに夜用の生理用品を替える」ことがあれば月経過多があると考えてよいでしょう。特に母親などの近縁者に同様の出血傾向があると見逃されやすいと言われていていますので、客観的に出血量が多いかどうかを確認する必要があります。

・出血傾向の診断

詳細な血液検査でほぼ診断は可能です。但し病気の急性期や合併症があると検査値に影響が出る場合もあるので、正確な診断には 2~3 回の検査を要することがあります。先天性の出血傾向としては軽症のフォンウィルブランド病や血友病などが知られています。

・出血傾向の治療

出血している部位と程度により異なりますが、例えば月経過多なら経口止血剤で効果がみられます。大きな怪我や手術の場合には不足している因子を注射して補充する治療を行います。もしお困りの出血症状がある場合、気軽に当科にご相談いただきたいと思います。



手指の消毒・マスク着用

にご協力をお願いします

